

第5節 山形盆地の古墳の変遷と菅沢2号墳

最後に山形盆地における古墳の変遷を検討し、その中における菅沢2号墳の占める位置について検討したい。

山形盆地における古墳の分布を見ると、天童・寒河江より南の地域にほとんどが集中し、盆地北部ではその分布は希薄である（第116図）。南部の中では、須川東岸の、馬見ヶ崎川と立谷川流域の自然堤防上から丘陵にかけての地域に最も集中している。須川西岸では、山辺から山形市西南にかけての丘陵沿いに点々と古墳（群）が連なっている。前方後円墳は、山辺町の坊主窪1号墳と、上山市の土矢倉2号墳の2基が確認されているだけである。坊主窪1号墳は主軸長26mで、築造年代を検討し得るような遺物は出土していないが、墳形などから6世紀代のものとされている（川崎利夫：1988）。土矢倉2号墳はV期の埴輪を伴うものであるが、墳丘の改変が著しく、墳形などの詳細は良く判らない。この2基の前方後円墳以外は、ほとんどが中規模の円墳で、菅沢2号墳は、山形盆地の古墳の中では最大のものである。

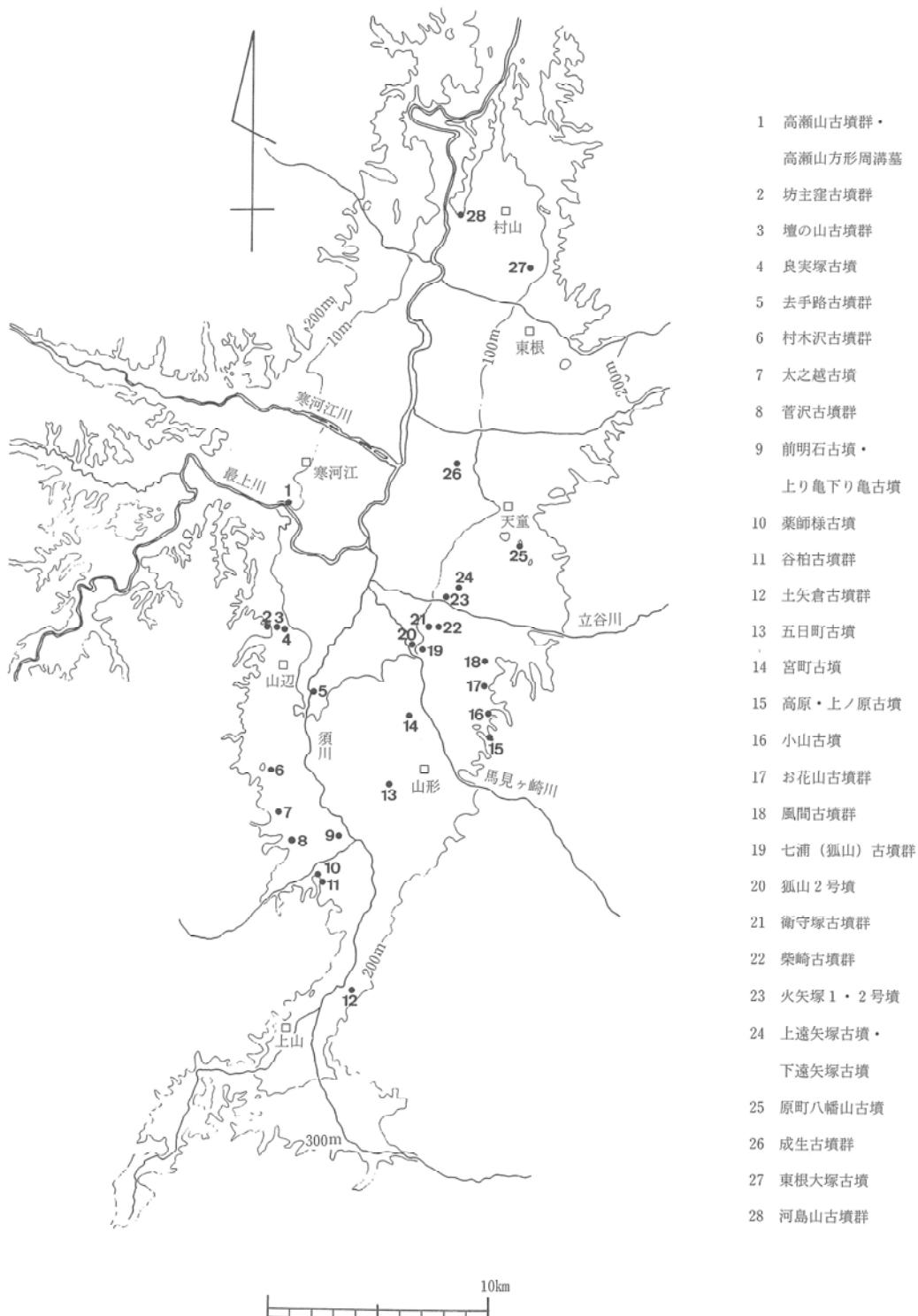
これらの古墳の内、その内容が明らかとなっているものは少なく、内容が知られているものについても調査されたのが古い例が多い。また調査されたものでも、総じて遺物の出土が少ないため、築造時期の検討が困難なものも少なくない。以下、その主なものについて、検討してみたい。

まず前期にさかのぼる可能性があるものとしては、東根市東根大塚古墳と、寒河江市高瀬山遺跡の方形周溝墓があげられる。

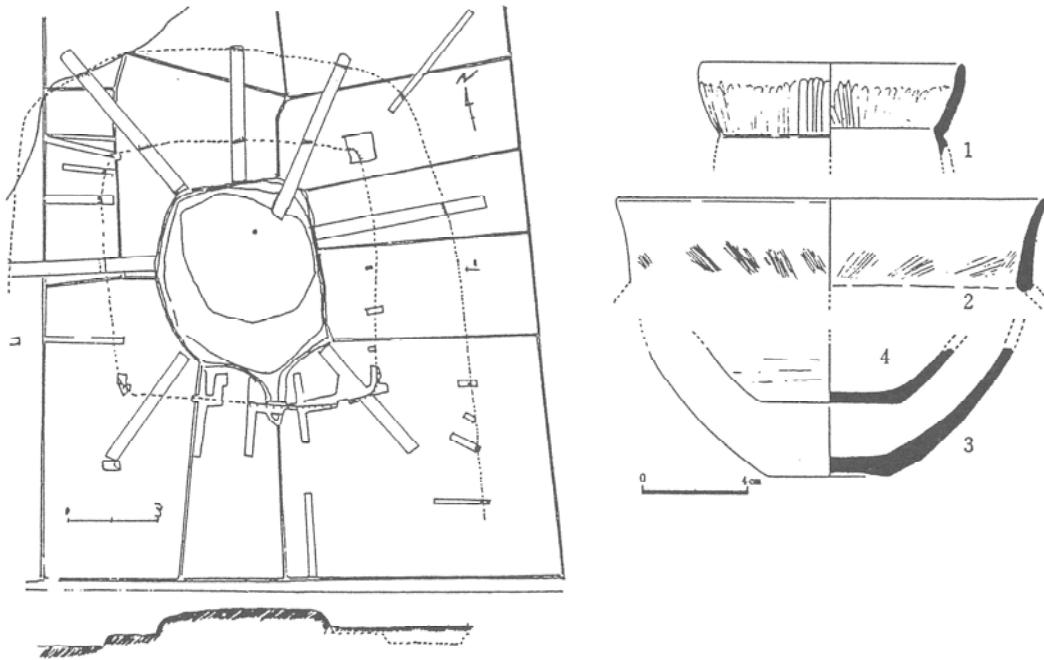
東根大塚古墳は、1辺約30mの方墳で、土師器が出土している（伊藤忍：1971、第117図）。これらの土師器は、「封土内出土」とされるもので、出土層位に問題を残すが、一応これらの土師器が古墳築造時期に近いものと考えておく。これらの報告されている土師器の内、1は口縁部が内弯して開く壺と考えられるものである。これはその特徴から、塩釜式に属するもので、口縁部内外面にヘラミガキが施されていることから、塩釜式の中でも、最も新しい段階までは下らないものであろう。

高瀬山遺跡の方形周溝墓は、溝の内側での辺の長さが13～15mのものである（佐藤正俊他：1982）。溝埋土から土師器が若干出土している。土師器は体部の小破片ということで、これで時期を検討することは困難と思われるが、これまでに東北地方で発見されている方形周溝墓は、塩釜式の時期に限られていることから、前期にさかのぼる可能性が高いものと考えられる。

山形盆地における前期古墳の様相については、まだ明らかでないことが多く、今後の調査・研究に待たねばならない。特に、古墳分布が集中する、南部でまだ確認できていない。しかしながら、今後前期に遡る古墳の発見があったとしても、次にみる中期後半以降に、一挙に古墳



第116図 山形盆地の古墳分布図



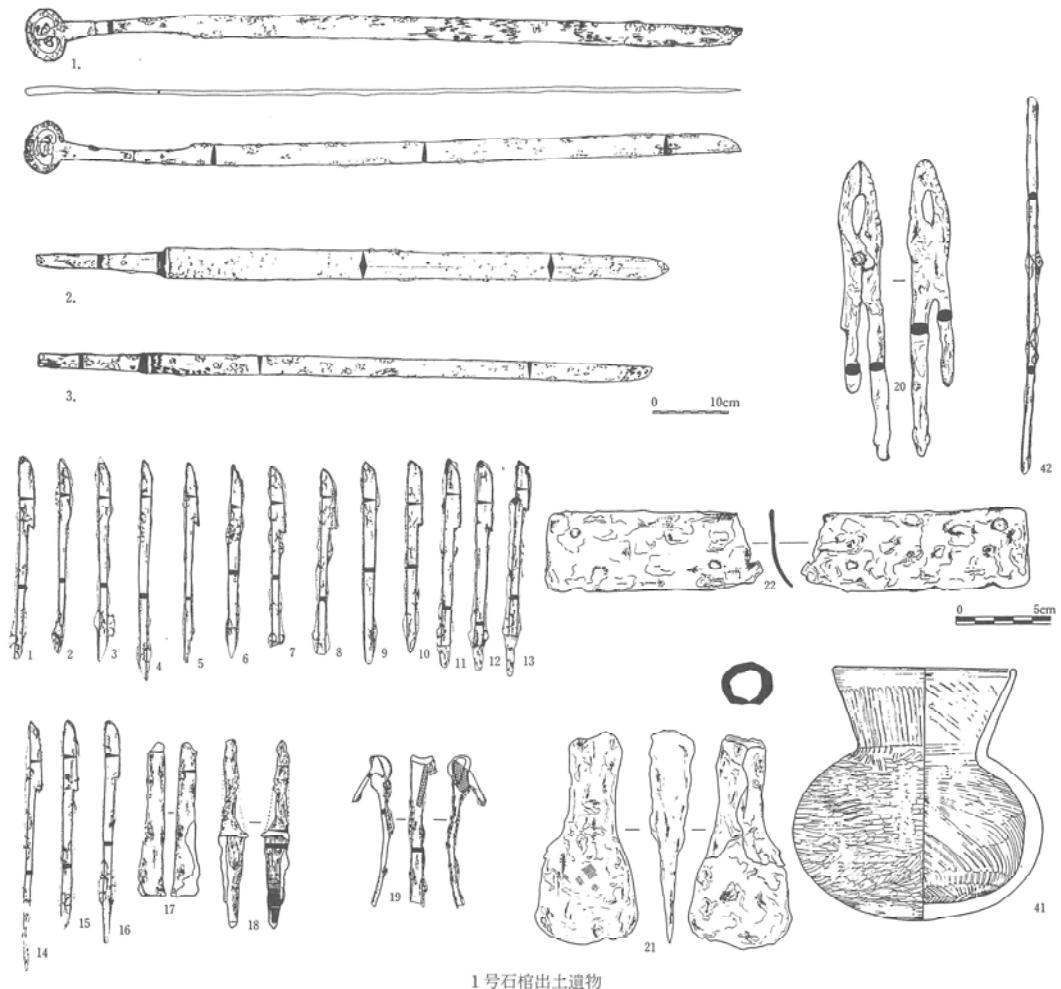
第117図 東根市東根大塚古墳

が拡大する時期と比べると、その希少さは変わらないであろう。

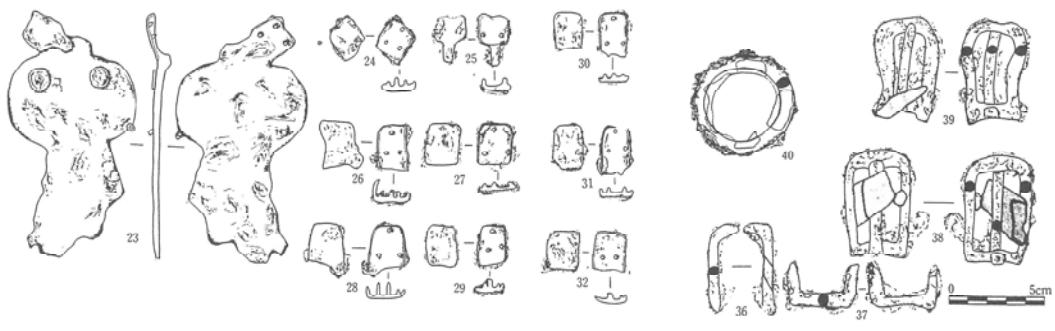
山形盆地の古墳は、ちょうど菅沢2号墳が築造される頃を境に、その数が一挙に増大し、また分布範囲も大きく拡大する。

山形市衛守塚古墳群は、馬見ヶ崎川と立谷川にはさまれた自然堤防上に立地するもので、現在はほとんどが破壊されて残っていないが、かつては12基あったとされる（柏倉亮吉：1973）。その内の2号墳は、明治12年に土取りが行われた際に、主体部の木棺が発見され、注目されたものである（後藤守一：1924）。この2号墳には、周囲に丸太が打ち込まれたような状態で並んでいたと報告されており、近年、これは木製の埴輪ではないかという指摘がなされている（高橋美久二：1988）。衛守塚2号墳から明治12年に出土した遺物は、東京国立博物館に所蔵されている。東京国立博物館所蔵の遺物の内、土師器の鉢とされているものは（東京国立博物館：1968、p.49）、肩がはり口縁部がくびれる小型平底の壺と思われるものである。この種の小型平底の壺は、引田式の古段階に認められ、それ以降には続かないことから、衛守塚2号墳の築造はこの頃と思われる。また2号墳の周囲の古墳から出土したと伝えられる遺物の中に、鉤状の取手を有する提瓶があることから、6世紀後半まで古墳群は続くものと考えられる。

山形市大之越古墳は、菅沢古墳群の北約1.5kmに位置し、1978年に山形県教育委員会によって発掘調査がなされている（川崎利夫他：1979）。径15～16mの円墳で、2基の箱式石棺が検出

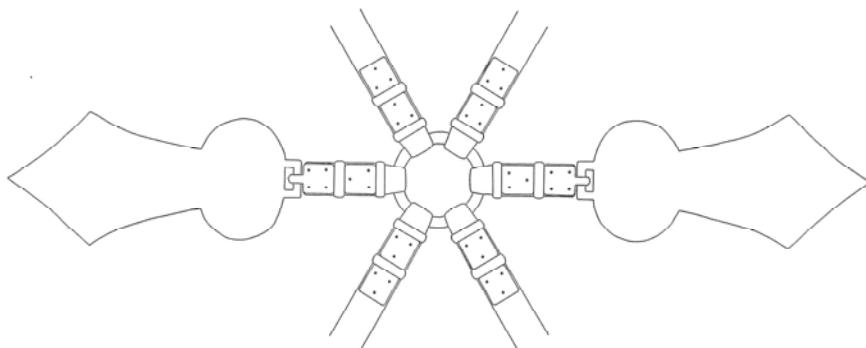


1号石棺出土遺物



2号石棺出土遺物

第118図 山形市大之越古墳出土遺物



第119図 大之越古墳出土馬具想定復元図

されている。箱式石棺は一部が重なって造られており、2号石棺→1号石棺という新旧関係が判明している。1号石棺内からは環頭大刀・鹿角製装具の痕跡を有する剣と刀・鉄鎌・鉄鉗・土師器壺などが出土している。2号石棺の棺蓋上からは剣菱形杏葉などの馬具が出土している(第118図)。

この最初の埋葬である2号石棺の棺蓋上から出土した飾帶金具は、剣菱形杏葉に付いているものを含めて、10点が図示されている。出土遺物の一覧表では「飾帶金具・その他」が11点となっており、本文中では飾帶金具が12点となっている。表と本文の記載の違いは杏葉に付いているものを数に入れたか入れないかの違いであると考えられることから、一応ここでは、杏葉に付いているものも含めて12点として検討する。これらの飾帶金具の内、杏葉に付いているものには舌状の釣舌金具が付き、その本体には鉢が4本認められる。杏葉は残っていないが、同様のものがもう一点ある。それ以外は方形のもので、鉢が3本認められ、また報告の図には示されていないが、責金具が鋲着しているものが認められる。報告で、遊環とされているものは環状雲珠と考えられ、先の飾帶金具の構成から、第119図のような尻繫が復元できるだろう。この種の尻繫は、f字形鏡板と剣菱形杏葉の伴う馬具に多く見られるもので、中期後半から後期にかけて盛行したものである。剣菱形杏葉については、金銅板の覆い方が変化していくことが指摘されているが(小野山節:1964)、大之越古墳出土の杏葉は劣化がはなはだしく、鉄板の上に金銅板などをかぶせていたかは検討できない。また剣菱形杏葉は、時代が下るにしたがって剣菱部が長くなり、全体に大型化していくが(坂本美夫:1985)、大之越古墳のものは大型化していないことから、剣菱形杏葉の中でもさほど下るものではないだろう。

一方、新しい埋葬である1号石棺から出土した土師器の壺は、内外面とも丁寧なミガキが施される点で類例が無いが、体部の高さに比べて口縁部の高さが低いという形態は、引田式に特徴的に見られるものである。また、1号石棺からは鹿角製装具の痕跡がある剣と刀が出土しているが、鹿角製装具が刀に付けらるのは中期後半以降と考えられることと、土師器の様相は矛

盾しない（藤沢敦：1990）。

1号石棺の埋葬が引田式期で、それより古い2号石棺から馬具が出土していることから、先行する2号石棺の年代をさほど引き上げることはできないだろう。したがって、大之越古墳の築造年代も、1号石棺と同じく引田式の時期の中と考えておきたい。

山形市お花山古墳群は、馬見ヶ崎川と立谷川の間に西に迫り出す山地の裾の小丘陵上に立地する古墳群である。山形大学に所蔵されている風間古墳・鷺ノ森古墳から出土したと伝えられる埴輪の、その風間とはお花山古墳群の北約1km、鷺ノ森は同じく南西約500mのところの地名である。このお花山古墳群は1982・83・86年の3ヶ年にわたり、山形県教育委員会によって発掘調査が行われており、周溝が確認できず主体部のみが確認されたものもあわせて、合計25基が確認されている（長橋至他：1985、長橋至：1987）。周溝が確認されたものは、いずれも円墳で、径7～19mの小規模なもので構成されている。主体部は木棺直葬と箱式石棺である。1号墳と22号墳の主体部から鏡が出土しており、山形盆地では唯一の例となっている。報告者の下限は7世紀前半、上限は5世紀後葉との年代的位置付けに基本的には異論はないが、出土遺物のほとんどが佐平林式併行期に集中するように見受けられ、古墳群築造のピークが比較的短い期間にあったことが窺える。

このお花山古墳群に見られるような、中小円墳で箱式石棺を主体部とする古墳群は山形盆地には多く、谷柏古墳群（17基）、高原古墳群・上の原古墳（合計6基）、狐山古墳群（10基）などがあげられる（柏倉亮吉：1973）。東北地方では、古墳の主体部に箱式石棺が使われるには、これまで知られているものでは、中期後半から後期にかけての時期である。出土遺物から年代が確実なもので、7世紀以降に箱式石棺を主体部とするものはこれまで知られていない。しかし、山形盆地では、横穴式石室を主体部とする古墳が知られておらず、これら箱式石棺を主体部とする古墳を6世紀までのものと考えた場合、7世紀に編年しうる古墳がほとんど無くなってしまう。あるいは、山形盆地では横穴式石室の導入が遅れ、箱式石棺が遅くまで残るという可能性も否定しきれない。ただ出土遺物から確実に7世紀に下る例がないことから、これら箱式石棺は、6世紀代で終わるものとしておきたい。山形盆地での終末期の古墳のあり方の検討は、今後に残された大きな課題であろう。以上の検討をまとめたものが、第38表である。

先にも述べたように、菅沢2号墳が築造される中期後半を境にして、山形盆地の古墳は大きな変化を示す。すなわち、それ以前では限られた地域にごく少数の古墳が築造されているだけなのに対して、菅沢2号墳が築造される頃から、盆地内の各地に古墳の分布が拡大し、その数も大幅に増加していく。同様に中期後半に古墳の変遷の画期があり、それに伴って様々な社会的変化が認められることは、東北地方全体に普遍的に認められることである（辻秀人：1989・1990、藤沢敦：1990）。したがってこのような変化は、単に各地域の内的要因だけでは説明でき

A.D.300		400		500		600		馬見ヶ崎川流域		上山		馬見ヶ崎川流域		東根		
土師器	須恵器	埴輪	寒河江	山辺	山形西南部											
1																
2A																
2B																
3																
塙釜式																
高瀬山																
方形周溝墓																
南小泉式	TK73															
引田式	TK216															
佐平林式	TK208															
併行	TK23															
TK47																
MT15																
住社式	TK10															
TK43																
票田式	TK209															
	TK217															

衛守塚古墳群



IV期

V期前半

V期後半

大之越

第38表 山形盆地の古墳編年表

ないものであり、その背後に畿内の王権を中心とする勢力の介在を示唆するものである。またこの時期以降、中小円墳からなる古墳群が成立し、そのため築造される古墳の数が一挙に増大していることは、古墳築造可能な階層が拡大していることを示している。おそらく、これらの階層を取り込む形で、畿内王権を中心とする勢力が地方経営を拡大していったことを、この時期の古墳の変化は示すのである。菅沢2号墳に畿内の特徴を色濃く残した埴輪が樹立されていることも、このような動向の中で理解されるべきものと考えられる。菅沢2号墳に葬られた首長が、畿内を中心とする先進地域の勢力と結び付いたなかで、このような埴輪がもたらされたのであろう。

山形盆地の古墳の中で、菅沢2号墳は円墳ではあるものの、傑出した規模を有している。またその埴輪の内容も、東北地方全体を見渡しても、特に充実したものである。これらのことから、菅沢2号墳に葬られた首長は、山形盆地の中で、特に大きな権力を握った支配者であったと思われる。したがって、この時期の古墳の変化に見られる、政治的支配のあり方の変化の中で、特に重要な位置を占めた人物であったであろう。

畿内王権を中心とする中央の勢力が地方経営を進めていく過程で、それらの勢力と結び付き、山形の地で大きな権力を確立した首長の奥津城として築造されたのが、この菅沢2号墳であったと考えられる。